

お元気ですか

発行所・(福)横浜市社会福祉協議会
障害者支援センター

〒231 横浜市中区桜木町1丁目1番地
-8482 横浜市健康福祉総合センター9階
TEL 045(681)1211・FAX 045(680)1550
http://www.yokohamashakyo.jp/siencenter/

編集発行人・内嶋 順一

2022 / 6

気軽にいのでかけできる街に！
障害のある人を見守る地域づくり

「青葉区障がい者後見の支援室ほつぷ」では、障害理解のあるお店を増やすことで、障害のある人を地域で見守る体制を作つていこうと、青葉区自立支援協議会(※)と共に『あおばエール協力店(以下、「協力店」)の取り組みを進めてきた。

きつかけ

「ほつぷ」の帆苺さんは、障害者後見の支援室の登録者には、職場や日中活動先と自宅との往復で、地域の人たちと接点の少ない人も多く、彼らのあんしんキーパー(※)を探す難しさを感じていた。様々な人

が利用するお店による見守りができないかと、青葉区自立支援協議会に投げかけ、約二年検討し、昨年からの取り組みを始めた。

あおばエール協力店

「障害者の地域生活を応援したい」という思いのあるお店に、あんしんキーパーとして登録いただき、それぞれができる範囲で見守つていただく。

協力店には、障害別の対応方法をまとめた『青葉区障害理解ハンドブック』を配布するほか、障害者支援の専門機関が対応方法の相談に応じている。また、障



配布しているハンドブック

害のある人やその家族が気軽に利用できるように、協力店であることを示す『ス

このステッカーが目印!



模索しながら

徐々に協力店が増え、この四月で三十九店になった。その一方で、お店の方から、全ての障害のある人に対応できないからと、登録を躊躇する声もある。帆苺さんは「協力店が障害のある人を受け入れるという一

方的な関係ではなく、どうしたら安心して利用できるのか、協力店、障害のある人や家族、支援者が一緒に考えていくことを大事にしていきたい」と話す。今年から、障害のある人が協力店を利用した様子も発信し始めた。協力店と障



害のある人が交流し、理解が深まり、誰もが暮らしやすい街になることを期待している。

あおばエール協力店
問い合わせ先
事務局・青葉区障がい者
後見の支援室ほつぷ

電話 045-532-3110
FAX 045-532-3240
あおばエール



※青葉区自立支援協議会…区内の障害者支援の関係機関が参加し、区内の障害者のニーズや課題について話し合っている。

※あんしんキーパー…地域での登録者の見守り体制の構築を目指す障害者後見の支援制度。「あんしんキーパー」は、障害のある人の地域生活を見守つていただくボランティアとして、後見の支援室に登録し活動。それぞれの可能な範囲で、登録者をさりげなく見守る場合や、地域で暮らす障害のある人を広く見守る場合がある。

望遠鏡

近年オリンピック競技でポッチャが人気の的。普通のボーリングのイメージであった

が、競技会場で驚きの発見連続だった。一番注目したのが「ポッチャスロープ」を使つての投球。車いすの競技者が口にくわえたスティックでボールを自分の意志で押し、ボールがスロープに沿つて転がり、フロアを早い速度で直進し相手ボールを弾き飛ばす。一瞬競技者が手で投げたのかと勘違いする位だ。手で投球出来ない競技者にとつてこのスロープは強力な助っ人です。球をスティックで突くやり方の他に、視線で動かす・息を吹き付ける等最新技術を駆使しての投球装置が開発されていると聞く。障害者が自分の意志通りに投球出来る喜びを持つて！これは嬉しい限りです。

(横浜市肢体不自由児者父母の会連合会 熊坂 康)

コロナ禍でのクラスター発生！ 心を照らす支援と今後の課題

今年二月、第六波のオミクロン株が大流行し、連日ニュースで感染者数が報じられていたその時に、金沢区にあるグループホーム(以下GH)二館(ともに咲くらす運営)では、同時多発的に感染者が発生した。

この時期、医療体制がひっ迫していたこともあり、感染された方の入院は叶わず、家族での看護も難しいことから、GHで療養することとなった。

最初に発症したAさんは日常的に複数のヘルパーや訪問看護を利用していましたが、感染により、それらのサービス事業所が一時撤退する事態が発生。また、Aさんの支援をしていたGH職員が次々と感染、勤務シフトを大幅に変更せざるを得なくなった。感染していない入居者については、緊急措置と

しての短期入所を模索したが叶わず、ご家族に一時帰宅の受け入れを依頼するも、家族の高齢化などの事情で全員の帰宅はできなかつた。そのため、両館ともゾーニングをしながら感染者と非感染者の同居が続いた。

目に見えないウイルス、先の見えない不安

感染した方が療養しているGHは、常勤職員が中心となり支援にあつた。職員は昼夜を問わず、防護服を着て看護・消毒をし、関係機関との連絡調整に追われる日が続いた。しかし、一館では、他の入居者にも感染が広がり、クラスターとなった。

この時のことを管理者の大内さんは「感染者を出してしまったことへの自責と出口の見えない長時間労働の疲れ、感染への不安で、追い

込まれていた」と振り返った。

GHからのSSOS 心癒えた活動ホーム

両GHの入居者が区内の機能強化型地域活動ホームの年中活動や余暇事業を利用していったことから、活動ホーム二館に支援の要請をしたところ、活動ホームシーサイドはAさんの個別支援に、金沢福祉センターは泊り勤務の

支援に入ることとなった。実際に支援に入つた六日間について、シーサイド高城所長は「法人のコロナ担当として研

修も受けていたので、正しく防護することで感染リスクは軽減できると考えていた。活動ホームが地域のGH支援を担う必要性を普段から感じていたため、特別なことをしたわけではない」と言う。同じく応援に入つた金沢福祉センター川井所長と地域生活支援事業担当の高橋さんは、「大内さんが入居者の状況やGH内で

の支援を時系列にまとめてくださったので、スムーズに支援に入れた。また、入居者にも説明してくれていたの

温かく迎えてもらえた」「余暇活動で会う時とは違う暮らしの場での様子を知ることが出来てよかった」と話してくださいました。

見えてきた課題 支援の仕組みづくり

一方で、両所長とも、感染者の看護や感染症対策については専門家による医療的支援を手厚くする必要があるので、区域や市域でGHを支える仕組みを整えることが、感染症だけではなく大規模災害時等に備えて急務ではないか、という課題を挙げられていた。大内さんも、来るべきBCP義務化に向けて、実効性のある協力体制や協定が必要とおっしゃっていた。

職員それぞれの思い

今回、陽性者の個別対応を担った職員の高

橋さんは、シーサイドの高城所長が事前にご本人の様子やホーム内の衛生管理の細かい聞き取りをしたうえで、必要な防護服や衛生品を準備し、的確に支援を行う様を見て、自身が他のGHの応援に入る場合のヒントを得たという。大内さんは、これまでGHでは、家庭的な雰囲気大切にしていたのに、感染症対策によつて、それらが奪われていることを憂いていた。十七日間の療養期間中、心が折れかけた時に「志を失わなければ侍になれますよ」という朝ドラのセリフに励まされ、必ず道が開けることを信じたと話されていた。

当にして用意してくれた。皆がその食事を楽しみにしていた。」と感謝されていた。今回のコロナの経験を経て、「基本的なコロナの対応の仕方は肌身で理解した。心細い中で、些細な支援や思いやりのある言葉がとても有り難く、心を照らしてくれた。経験もした。今後、小さな法人が同じ状況に陥つた際には、必ず力になりたい」と大内さんは語ってくださいました。



館内のゾーニングと整頓された衛生品



職員手作りのお弁当

「障害者虐待防止への取り組み」研修 ～虐待防止委員会設置の 概要説明や事例をおおして～

障害者虐待防止の更なる推進のため、令和四年度より各事業所には虐待防止委員会の設置等が義務化された。具体的な取り組みについて多くの疑問の声が寄せられたことから、品田和紀氏（横浜市健康福祉局）、赤川若菜氏（NPO法人地域生活センター）、山口博之氏（社会福祉法人夢21福祉会）の三名を講師に、研修会を開催した（市障害者地域作業所連絡会・市障害者地域活動ホーム連絡会・市グループホーム連絡会と共催）。研修は、会場開催とオンライン配信を行い、延べ一四六人の方が参加した。

義務化のポイント

最初に、品田氏より仕組みの概要説明があった。義務化のポイントは三つあり、①全スタッフへの研修実施、②

虐待防止委員会の設置、③虐待防止等のための責任者の設置。①の研修は他機関の研修に参加した場合も実施とみなされ、内容は「虐待防止の基礎的内容など適切な知識を普及・啓発する」ものとされている。②の虐待防止委員会は、事業所単位でなく法人単位の設置も可とし、全スタッフに委員会での検討結果の周知も行う。また、①②ともに実施の記録が重要となる。③の責任者は、委員会への参画、虐待相談に関する周知・掲示等を行うこととされる。

事例の紹介

次に、先駆的に虐待防止に取り組む法人のお二人にお話しいただいた。

初めにお話しいただいたのは赤川氏。NPO法人地域生活センターは九カ所のグループホームと訪問系サービスを運

営。二〇一九年度から常勤職員のワーキンググループで虐待防止の取り組みを進めている。何をしたら良いのか、何が出来るのかを考えるところから始まり、スタッフ全員がより良い支援を目指せるよう模索。取り組みを通して、三年かけて作成、改訂した「セルフチェックシート」は法人内の全スタッフに実施。忙しい日々だが、改めて自分の支援を振り返る機会を作り、正解のないこともあるが、意見交換をする大切さを感じたという。今後は虐待防止委員会の設置に加え、内部研修や障害者虐待防止法の全スタッフへの浸透を目指し、取り組んでいくとのこと。

次にお話しいただいたのは山口氏。社会福祉法人夢21福祉会は五カ所の生活介護と九カ所のグループホームを運営。ホームで起きた虐待をきっかけに、二〇二六年度から取り組みを進めている。その内容は各事



左から順に品田氏、赤川氏、山口氏



ホップステップゆとり 大和久 知恵子さん

NPO法人新のホップステップゆとりで昼食づくりのボランティアをされている大和久さん。約23年間、同法人の活動ホームやホップステップゆとりで非常勤職員として勤務し、定年退職後もボランティアとして事業所を支えている。

昼食づくりは9時半から始まり、約2時間で約15食の昼食を一人で作る。「活動ホームではもつと沢山作っていたのでへっちゃらです」と話す。献立は野菜が中心で、時には利用者のリクエストで好み焼きやラーメンを作ることも。

元々はヘルパーの仕事でされていたこともあり、人と接することは大好き。地域でもスポーツ推進委員を19年間務め、現在も防犯指導員など地域活動に携わってい

る。どんな活動でも明るく声かけをすることを心掛け、昼食時も利用者さん一人一人に声をかけている。同事業所の神長所長は、「明るい人柄で、みんなを和ませてくれており、安心して任せられます。」と信頼も厚い。

「ここは自分の居場所です」と話す大和久さん。利用者さんとも長い方だと約20年の付き合いで、自分の子どものような感覚とのこと。早くコロナ前のように利用者さんと旅行や外出プログラムに出かけたいと話す。大和久さんの周りは笑顔がたえず、昼食後は自然と利用者さんが集まっていた。



令和四年度 横浜市社協障害者支援センター事業と予算

今年度の予算総額は、約三十一億三千万円。

新型コロナウイルス感染症の影響による障害者地域活動ホームの生活支援事業の実施回数減等により、前年比約六千四百万の減額となった。

地域における 障害理解の推進

「セイフティネットプロジェクト横浜」支援事業では、コミュニケーションボード等のツールを用い、当事者・家族の主體的な活動を大切にしながら、地域防災拠点等への働きかけを進める。

う、地域団体の取組を支援する。

後見的支援制度の推進

各区の運営法人と協働し、地域の身近な見守りや本人の希望と目標に基づく支援等を行う。また、制度のあり方検討会で確定した「業務運営指針」を関係機関に周知し、引き続き安定的かつ持続的な制度運用に努める。

今後も区社協や地域ケアプラザ等との連携を進め、登録者の希望に基づいた身近な見守り体制づくりを進める。

横浜あゆみ荘の利用者 ニーズの掘り起こしと 稼働率の改善

新型コロナウイルス感染症対策を継続し、安心・安全にご利用いただけるよう努める。

また、障害者団体や特別支援学校等のニーズを的確に把握するとともに、積極的なPR活動を行う。

に、積極的なPR活動を行う。

更に、余暇支援事業に加え、区社協、ウイリング横浜等と連携した当事者支援者向けの研修や障害理解の促進に向けた啓発事業に取り組み、受注センターをわくくる

新型コロナウイルス感染症の影響により、事業所等への作業依頼や定期販売等が再開されず、受注・販売機

会の回復が遅れている。感染状況を注視しながら、更なる受注・販売機

機会を獲得に取り組み、工賃向上と社会参加の促進を図る。

ガバナンスとコンプライアンスの徹底

運営支援の観点から事業所・団体の適切なリスク管理が求められている。そのため、コンプライアンス研修を開催するとともに、会計実務の支援や体制強化した監査の実施により、各事業の適切な運営を支援する。

移動情報センター！

福祉バス事業の実施

各区社協や関係団体と連携し、適正な運営を行う。把握した課題の整理、当事者や家族の思いと生活課題の集約を進め、解決に向けた検討に着手する。

地域訓練会助成事業

地域訓練会の運営を支援し、活動費を助成する。併せて、関係機関や家族に対して、訓練会の周知に取組む。

作業所型助成事業

作業所型の運営を支援し、その運営費を助成する。

助成予定：七十八か所

地域活動ホーム事業

機能強化型活動ホーム二十三か所の運営を支援し、その運営費を助成する。また、建物・設備の維持管理を行う。

グループホーム助成事業

A型グループホームの運営費助成と法定移行支援を行う。

助成予定：二か所

人権擁護事業

人権擁護の観点から啓発活動やモニター活動を行う。B型グループホームへのモニター活動は、関係機関と連携して実施する。

地域活動支援事業

医師・弁護士・税理士・理学療法士・看護師等を派遣し、専門相談を実施する。

研修事業

当事者や家族、関係機関職員等に対し、障害者福祉の総合的な研修を実施する。

令和4年度横浜市社協障害者支援センター事業予算

事業名	予算額(千円)
地域訓練会運営費助成事業	74,854
地域活動ホーム事業	503,755
地域活動支援センター作業所型助成事業	1,730,979
グループホーム助成事業	32,471
販路拡大事業	6,156
家庭介護事業	2,634
研修事業	1,687
福祉団体活動支援事業	3,000
地域活動支援事業	10,315
療育検診活動事業	614
啓発活動事業・障害者団体部会	2,940
調査研究事業	479
人権擁護事業	2,950
助成団体監査事業	6,000
地域作業所等賠償責任保険	1,344
セイフティネットプロジェクト横浜支援事業	2,893
福祉バス運行事業	57,214
障害者後見的支援制度	207,475
よこはま障害者共同受注総合センター事業	20,448
移動情報センター運営事業	157,310
横浜あゆみ荘事業	221,053
その他	83,786
合計	3,130,357

「トイレ貸します」から

つながる地域交流

活動ホームふたまたがわの取り組み

活動ホームふたまたがわの前には公園があり昼間は子供たちの遊び場になっているが、トイレがない。今から四年前、当時の山崎所長が「トイレを貸してあげてはどうか」と提案し、「トイレ貸します」と書かれたのぼり旗をたてることになった。当初、職員からは「わざわざのぼり旗をたてなくても」との声もあった。だが、実際にたててみると、公園に遊びに来た赤ちゃん連れのお母さんや小学生、配送途中のトラックの運転手が借りにくるようになり、改めてニーズがあったことを実感した。

ふたまたがわのトイレは、正面玄関を入つてすぐのところにある。借りに来た人は、「トイレ貸してください」と声をかけて入り、「ありが

とうございました」と言つて帰つていく。そこにたまたま出くわしたメンバーが小さい子供をみて「かわいいね」と声をかけ、一言二言やりとりする場面も見られるようになる。

令和二年六月のある日、二俣川小学校の先生と小学三年生の生徒三十人が突然やつてきた。町探検で近くを歩いていたところ、生徒の二人がふたまたがわの建物を見て「トイレの場所だよ」と言ったことで、寄つてみようという話になったのだ。その時は、簡単な説明で終わつたが、先生から「福祉のことを教えてください。」何か一緒にやりませんか」と声をかけられ、ふたまたがわとしても「いいですね、やりましょう」と話が進んだ。七月には、再度ふたまたがわ

に来てもらい館内見学と説明を行った。他にもいろいろなアイデアが出たが、コロナの感染が広がつたため、実行に移すことができずに終わつてしまった。

ただ、この訪問により、子供たちの中では、「トイレを借りる場所」から、「車いすの人がいる。大人の人だけど、大きな声を出している。仕事をしているみたい。ここは何だろう」と興味関心が深まった。そして、トイレを借りる目的以外でも、小学生が訪れるようになる。次第にメンバーが活動しているなかに地域の人がいる風景があたりまえになつていった。



のぼり旗から看板へ



小学生の館内見学

訓練室に置いてあるピアノを見つめ、弾いてくれる小学生がいた。とてもうまいので、メンバーのうちに聴かせてほしいと頼んだところ、快く引き受けてくれた。そして小学生によるミニコンサートがこの三月に実現した。

地域交流というと、何かイベントを考えてしまいがちだが、地域の人が当たり前のようにならなければいけない。地域交流が生まれるか、楽しみだ。

後、日常の延長にどのような交流が生まれるか、楽しみだ。

※コロナ感染状況によりトイレの貸し出しは一時中断していたこともあり、また、現在はのぼり旗から看板が変わっています。

都筑区の「アスタPC」に通う五十嵐さんは、去年からぬいぐるみの製作を始めた。元々、絵を描くことが得意で、事業所内には五十嵐さんが描いたキャラクターの絵がたくさん飾られている。

ある時、絵に描くだけではなく、ぬいぐるみを作ってみよう、と思いついて、製作に取り組み始めたという。「有名なキャラクターのぬいぐるみはどこにでもあるから、あえてマイナーなキャラクターで作ろうと思った」と話し、好きなゲームのキャラクターのぬいぐるみを作るを既に三十個以上作り上げたそう。



〜ぬいぐるみ製作〜アスタPC(都筑区)五十嵐 拓哉さん



完成したぬいぐるみ

があれば手芸屋まで出向くという。作り方は、フェルトを切つて各パーツを作り、中に綿を詰め、ミシンで縫い合わせていく方法。イラスト等を参考に作っているそう、細部まで丁寧に再現されていた。

裁縫の技術は、誰かに教わつた訳ではなく、我流とのこと、「習うより慣れる、です」と笑顔を見せた。

完成したものは、事業所に持つてきて、皆に見てもらおうそう。「すごい、と言ってもらえる」と嬉しそうに話していた。



緊張しながら紹介してくれた五十嵐さん

よこはま障害者共同生活総合センター 受注センター わーくる通信



わーくるでは、登録事業所向けに研修を行っている。昨年度は、メンバーさん(利用者)を主な対象とし、清掃作業の基礎を学ぶ内容で三月七日・十一日の二回実施した。

協同組合との連携

講師は、横浜建物管理協同組合の方々。これまで、教育現場と連携し、個別支援級で生徒の将来を見据えた研修を行ってきた実績を持つ。建物管理、清掃のプロから技術を学ぶ貴重な機会となった。

動画も活用

プログラムは、作業時の身だしなみやマナー、自在ぼうき・タオルモップ等の正しい使い方、窓の拭き方等。まずは動画で説明を視聴、注意事項を知り作業の方法をイメージした後、実技を行った。自在ぼうきの使い方では、細かく丸めた新聞紙をゴミに見立て

た。一度に掃く幅を養生テープで示し、掃く動作とほうきを軽く床に当てごみを落とす動作を「スー、トン」との掛け声に合わせて等、多くの人に分かりやすく覚えやすい工夫がされていた。



参加者の声

受講したメンバーさんからは、「身だしなみのビデオを見て、ひげや鼻毛をそのままにしないよう気をつけようと思いました」「学習したモップやほうきの使い方を校内清掃で実践、練習しています。難しいと感じることもありましたが、学んだことを活かしていきたいです」「座学と実践だったので分かりやすかったです。この研修を通して、道具を

大切に扱おうと思いましたが」等、前向きな感想が聞かれた。

継続した取組に

横浜建物管理協同組合の千田さんからは、「職場でのマナーや正しい道具の使い方を知ることがは作業効率、美観向上、疲労軽減にも繋がります。これは決して難しい技術ではありません。この約束事を習得し、仕事として働く上での『プロとしての意識』を多くの方々に広げてもらえればと思います。私たちも非常に良い経験になりました。この研修会の継続を期待しています」とのお話をいただきました。今後も、より多くのメンバーさんがスキルアップできるように、受講の機会を提供したい。



あゆみ荘

だより

学校様向け夕食

「鶏のクリーム煮セット」提供開始

四月二日より、学校様向け夕食メニューの第二弾として、「鶏のクリーム煮セット」(九〇〇円)の販売を開始しました。鶏肉と野菜たっぷり、のクリーム煮に加え、おかず(エビフライ、ポテト等)、ライスセットにしたメニューで、一口大/ミキサーへの再調理も承ります。

また、低アレルゲン材料を一部に使用することもできますので、事前にご相談ください。

学校様向け夕食メニューの定番「特別カレーセット」(カレーライ



鶏のクリーム煮セット

ス、唐揚げポテト等のセットメニュー九〇〇円)とともにご利用いただけます。れば幸いです。

障害者研修保養センター 横浜あゆみ荘紹介

〜客室編〜

横浜あゆみ荘は「障害のある方やそのご家族が安心して宿泊でき、ほっと一息できる場所が欲しい」という声を受け、昭和五十九(一九八四)年十二月に開所しました。これまで百五十万人以上の方にご利用いただいております。

あゆみ荘は宿泊・日帰り用の客室や大小の浴室のほか勉強会やスポーツ等ご利用いただける研修室・機能回復訓練室(体育館)を備えております。今回は「客室」を紹介いたします。

「客室」は二階にあり、洋室が四部屋、和室が九部屋の十三部屋です。洋室の室内やトイレは車椅子でゆったりと移動できる広さがあり、ベッドを常時二台設

置しています。またエキストラベッドを追加で二台設置できる洋室もあります。

畳の和室は座りながらゆったりとくつろぐことができます。お布団のご用意になります。エキストラベッドも設置できますのでご相談ください。

和室(4~6名
定員)



洋室(2~3名
定員)



あゆみ荘ホームページでは動画でも詳しく説明していますのでぜひご覧ください。



横浜あゆみ荘
ホームページ

お問合わせは、

横浜あゆみ荘まで

045(941)83383